

「教育臨床総合研究11 2012研究」

## 大学体育における学習者の自己評価を促す授業実践の試み — 教員養成課程学生の間身体コミュニケーション力の育成に向けて —

A Practical Report of University Physical Education Class : Aimed Improvement of Teacher Training Course Students' Self Evaluation

廣 兼 志 保<sup>\*1</sup>

Shiho HIROKANE

大 橋 奈 希 左<sup>\*\*2</sup>

Nagisa OHASHI

### 要 旨

間身体コミュニケーション力の育成をめざす体育授業における評価システムの構築に向けて、学習者の主体的な取り組みを促す自己評価活動の試行と検証をおこなった。その結果、授業のガイドラインを設定し、毎回の授業の冒頭に単元全体の目標と個々の授業のテーマを提示して個々の活動との関連を伝達したことは、学習者の主体的な取り組みと自己評価活動に対して肯定的な影響を与えることがわかった。

〔キーワード〕 教員養成課程,間身体コミュニケーション, 自己評価

\*1島根大学教育学部初等教育開発講座

\*\*2上越教育大学大学院学校教育研究科生活・健康系コース

## I 本研究の動機及び目的

### 1. 本研究の動機

本研究は、教員養成課程入門期の学生のための体育授業の改善をめざして取り組んだ実践事例の報告である。

教員の身につけるべき資質としての「レスポンスする身体」の必要性が指摘されて久しい(廣兼・大橋,2008)。また、近年、運動が育むコミュニケーション能力に関する研究は様々な視点から取り上げられており、大学生を対象とした体育における授業研究も試みられている(杉山,2008,橋本,2009,西田ら,2009a,b)。しかし、管見の限りでは、対象を教員養成課程の学生に絞り込み、運動を通して間身体コミュニケーション力を育むための単元構成や評価方法の開発に取り組んでいる研究はまだ見られず、今後も取り組んでいく余地がある。

そのような状況の中で、筆者らは教員養成課程入門期の学生の間身体コミュニケーション力育成の試みに継続的に取り組んできた(廣兼・大橋,2008,2009,大橋・廣兼,2011)。ここでいう間身体コミュニケーション力とは、相手のからだの現れを自分のからだで感じ取り、今相手が置かれている状況を読み取って、それに協同的に応答して行動できる力である、と筆者らは措定している。筆者らは、それらの一連の実践報告の中で、体ほぐし運動及びダンスまたは身体表現活動を題材とする授業の実践を通して、教材の有効性を検証し、単元構成の原則を指摘した(廣兼・大橋,2008)。また、学習者自身が間身体コミュニケーション力育成をめざす身体活動の成果をふりかえることのできるような評価項目を作成し、提案した(廣兼・大橋,2009)。

現在、筆者らはこれらの研究成果をふまえて、教員養成課程入門期の学生を対象に、間身体コミュニケーション力の育成をめざす体育授業における評価システムの構築に取り組んでいる。この評価システムは「学習者による自己評価」「学習者同士の相互評価」「教師による評価」の三種からなるものである。本研究は、このうち「学習者による自己評価」を取り上げる。

### 2. 本研究の目的

本研究では、前述した一連の研究成果をふまえ、学習者の自己評価を授業の中でどのように運用するかについて、授業改善のための課題を設定し、課題解決の試行とその有効性の検討をおこなうことを目的とする。具体的には、学習者の主体的な取り組みを促すために、「授業が目指す目標をどのように設定し学習者に伝達したらよいのか」「その目標をふまえて自己評価項目をどのように提示したらよいのか」「学習者の自己評価をどのような方法によって拾い上げたらよいのか」といった課題を設定し、それらの解決に向けての試行の結果を報告する。次いで単元末に学習者が記述した内省文の分析により目標やテーマの提示に対する学習者の取り組みの姿勢を探り、最終的には課題の解決策として試行した事柄の有効性を検討する。

## II 本研究の方法

### 1. 本研究の対象

本研究の対象は、平成22(2010)年度に実施したS大学教育学部における教養教育科目「スポーツ実習I」の授業及びその履修者である。S大学教育学部1年生を対象とした「スポーツ実習I」の授業は、履修者を1班あたり30名程度の6班に分けて「陸上運動」「器械運動」「球

技」「体操・表現運動」の4領域でローテーションを組み実施されている。本研究は、そのうち「体操・表現運動」領域の授業を対象とした。対象となる授業について以下に示す。

実施期間：平成22年4月27日～7月27日 全4時間の授業を6回反復して実施した。

対象者：S大学教育学部1年生176名及び科目等履修生1名（男子65名 女子112名）  
計177名

実施場所：S大学柔道場

## 2. 本研究の方法

間身体コミュニケーション力の育成をめざす大学体育授業の実践にあたって、これまで筆者らは、目的にふさわしい教材の選定、そして、教材や活動から得られる学習者の実感に即した評価項目の作成、と順次研究成果を積み上げてきた。本研究では、それらの教材や評価項目を活用しつつ、学習者の主体的な取り組みを促すために、評価活動の充実をはかりたい。そこで、授業改善のための課題として、以下の①～③を設定し、これらの解決に向けて授業計画を構想し試行した。

課題①「授業が目指す目標をどのように設定し学習者に伝達したらよいのか」

課題②「その目標をふまえて自己評価項目をどのように提示したらよいのか」

課題③「学習者の自己評価をどのような方法によって拾い上げたらよいのか」

課題解決の有効性についての考察にあたっては、上記の学生の単元末課題における内省文をMicrosoft Excel 2007を用いて集計した後、SPSS Text Analysis for Surveys 3.0を用いてキーワードを抽出し、カテゴリー化した。このデータをもとに考察をおこなう。集計とカテゴリー化により得られたデータの具体的な扱いについては、「結果及び考察」で詳述する。

## Ⅲ 結果及び考察

### 1. 授業ガイドラインの設定と、達成目標及びテーマの伝達

課題①「授業が目指す目標をどのように設定し学習者に伝達したらよいのか」に対する解決策として、本研究では、まず、学習者が目標を意識しながら主体的に活動に取り組めるような環境づくりを試みることにした。そのため、まず、学習者が授業のすすめかたや評価のしかたの策定に参加できる場を設定した。そこで、授業実践に先だって、学習者全員を対象に事前アンケート調査をおこなった。その理由は、学習者が授業をどのようにすすめてほしいと考えているのか・どのように評価してほしいと考えているのかを明らかにし、その結果にそって授業のすすめ方や評価のしかたのガイドラインを設定するためである。

事前アンケート調査は、授業のすすめ方や評価のしかたに関する11個の質問項目と授業に対する希望に関する自由記述欄から構成されている。各質問項目は、全くそう思わない=1点、あまりそう思わない=2点、ややそう思う=3点、そう思う=4点、の4つの選択肢から自分の考えに最も近いもの1つを選択することとした。各質問項目の平均得点（4点満点）を算出し、得点の高かった項目の内容にそって、授業のすすめ方や評価のしかたのガイドラインを設定した。事前アンケート調査の際に配布した用紙を図1に示す。

平成22年度 スポーツ実習1(体操・表現分野) 授業アンケート  
月 日

1班	2班	3班
----	----	----

自分の所属する班を○で囲むこと

このアンケートは、体操・表現分野の授業の進め方について、皆さんの意見を参考にするためにおこなうものです。どうぞ率直な意見をお答えください。

質問項目	回答欄(自分の考えに近い数字を○で囲んでください)			
	4 とても思う	3 やや思う	2 あまり そう思わない	1 全く そう思わない
1. 体操・表現分野の授業の進め方に自分の意見も取り入れてほしい。	4	3	2	1
2. 授業においては、学習の結果よりも学習の過程が大切であると思う。	4	3	2	1
3. 毎時間の学習を記録し、まとめて読み返すことは、自分の学習にプラスになる。	4	3	2	1
4. 学習の過程で級友からアドバイスを受けたり対話したりする機会がある方が良い。	4	3	2	1
5. 学習の過程で先生からヒントやアドバイスを受けたい。	4	3	2	1
6. 級友や先生の前で学習の成果を発表する機会があれば自分の学習にプラスになる。	4	3	2	1
7. 学習の評価は、自分でもふりかえって評価してみたい。	4	3	2	1
8. 活動のふりかえりを級友や先生と互いにコメントし合ってみたい。	4	3	2	1
9. 評価は、個人の良い点や可能性を他者と比較して行ってほしい。	4	3	2	1
10. 評価は、他者との比較ではなく個人の伸びについて行ってほしい。	4	3	2	1
11. 学習の成果だけでなく、学習の過程も含めて、評価してほしい。	4	3	2	1

【体操・表現分野の授業に対する希望があれば、以下に書いてください。】

図1 事前アンケート調査用紙

事前アンケート調査の結果から、学習者は、主に学習の過程を重視する傾向にあり、学習の過程で授業者や学習者同士からヒントやアドバイスを受けたり対話したりできることを望んでいることが明らかになった。また、評価においては、他者との比較ではなく個人内の伸びについて、学習の成果だけでなく過程も含めて評価してほしいと考えていることも明らかになった。調査の結果を表1に示す。

次いで、事前調査により得られた結果が授業の中で具体化できるように授業計画を構想した。まず、授業のガイドラインを作成し、初回授業の冒頭にオリエンテーションを実施して、学習者にアンケート調査の結果を伝達するとともに、ガイドラインを提示することとした。

表1 事前アンケート調査の結果

順位	質問項目番号	質問項目	平均得点
1	11	学習の成果だけでなく、学習の過程も含めて、評価してほしい。	3.54
2	5	学習の過程で先生からヒントやアドバイスを受けたい。	3.40
3	2	授業においては、学習の結果よりも学習の過程が大切であると思う。	3.35
4	10	評価は、他者との比較ではなく個人の伸びについて行ってほしい。	3.29
5	4	学習の過程で級友からアドバイスを受けたり対話したりする機会がある方が良い。	3.22
6	3	毎時間の学習を記録し、まとめて読み返すことは、自分の学習にプラスになる。	2.73
7	7	学習の評価は、自分でもふりかえって評価してみたい。	2.56
8	8	活動のふりかえりを級友や先生と互いにコメントし合ってみたい。	2.34
9	1	体操・表現分野の授業の進め方に自分の意見も取り入れてほしい。	2.31
10	6	級友や先生の前で学習の成果を発表する機会があれば自分の学習にプラスになる。	2.13
11	9	評価は、個人の良い点や可能性を他者と比較して行ってほしい。	2.08

「体操・表現運動」領域の活動は、毎時、体ほぐし、レクリエーションゲーム、レクリエーションダンスの3種目から構成された。そこで、これらの種目について、各々の種目の特性を生かし、かつ、授業者や学習者同士からヒントやアドバイスを受けたり対話したりできるような活動を取り入れて授業を構成するため、以下のようなガイドラインを作成し提示した。

#### 【体ほぐし】

☆スポーツの得意・不得意に関わらず、誰もがからだのしくみや感覚に意識を向けられるようになることをめざします。

☆仲間と関わる活動を盛り込み、楽しく、かつ、互いのからだを大切に、丁寧に関わり合えるようになることをめざします。

☆仲間と感想を語り合う活動を盛り込み、からだほぐしを通して得られた感じや気づきを共有し、お互いを理解し尊重し合えるようになることをめざします。

### 【レクリエーションゲーム】

☆シンプルな身体運動からなるゲームの活動を盛り込み、仲間と話し合ったり助け合ったりできることをめざします。

☆仲間と共に活動する中で、皆がゲームを楽しめる雰囲気をお互いに作れることをめざします。

☆ゲームの活動にあたっては、お互いにフェアな態度で参加できることをめざします。

### 【レクリエーションダンス】

☆仲間と共に踊る活動を盛り込み、お互いに楽しい雰囲気を作り出せることをめざします。

☆お互いにアイデアを出し合いながら、皆で一つのダンスを形づくっていく活動を盛り込み、メンバー1人ひとりの個性が発揮できることをめざします。

☆皆で息を合わせて踊ることを通して、メンバー全員の個性をミックスした新たな何かを形にすることをめざします。

また、評価については、以下のようなガイドラインを作成し提示した。

☆学習の記録を毎時間書いて提出することと、学期末に毎時間の記録を読み返して自分の成長をふりかえることを通して、1人ひとりの伸びを評価します。

☆一人ひとりが各時間に感じたことや得たことを尊重し、評価します。

☆個人差を尊重し、その人なりの精一杯の取り組みを評価します。

☆課題、単元末レポートを課します。提出の有無、提出期限までに出したかどうかを評価の対象とします。

## 2. 評価項目と一体になった達成目標の設定と提示

次に、単元全体を通しての達成目標を設定した。この目標は、2009年に作成した評価項目(廣兼・大橋,2009)と一体となったものである。設定した目標を下記に示す。

1. 仲間と楽しく授業に参加することができる。
2. 仲間の体を大切に丁寧に関わることができる。
3. 仲間の意見に耳を傾けたり支持したりできる。
4. 課題の達成に向けて仲間と積極的に意見を出し合える。
5. 仲間に声をかけることができる。
6. アイコンタクトを使って仲間と一緒に動くことができる。
7. 表情や動きから相手の気持ちを感じることができる。
8. 試行錯誤しながら動きを工夫できる。
9. 仲間を励ましたり支援したりできる。
10. 仲間と一つになったように感じられる。

これらの目標の達成に向けて、毎時の授業のテーマを設定し、一つひとつのテーマが単元全体の目標の達成に向かって段階的に積み上げられていくように展開を構成した。

そして、単元全体の目標の達成へ学習者の意識を向けるために、毎時の授業の冒頭にその時間の活動についてのオリエンテーションをおこない、単元全体を通しての達成目標を模造紙に書いて毎回掲示した。さらに、毎時のオリエンテーションでは、毎時の授業のテーマを伝達し、その時間の活動が総体として何を身につけることをねらいとしているのかを明示した。同時に、

その日の授業でどんな活動をするのかについても冒頭のオリエンテーション時に提示した。その際、個々の活動が何をねらいとし単元目標のうち主としてどれを達成することを期待されて設定されているのかについても伝達した。全4時間のテーマ及び活動とその目標を表2に示す。なお、表中の（ ）内の番号は、前述の達成目標に付した番号を示している。

表2 毎時のテーマ及び活動とその目標

時 間	第1時	第2時	第3時	第4時
テーマ	仲間と交流し、声をかけ合って活動しよう。	仲間とふれ合いながら交流しよう。	ひらめきを形にして動いてみよう。	グループでアイデアを出し合って課題を達成しよう。
体ほぐしの活動 (目標番号)	骨探検 (2,7,8)	動き探検 (8)	起き上がる動きの観察① (8)	起き上がる動きの観察② (3,4)
レクリエーションゲームの活動 (目標番号)	ドッジボール (5,6,8,9) 鬼なしフルーツバスケット, ボールまわし (3,4,8)	洗濯ゲーム (5,6,7)	ぐじゃぐじゃとまれ (3,4,8,9)	発信者は誰だ? (6,8,10)
レクリエーションダンスの活動 (目標番号)	ルパン三世 (8)	ルパン三世・グループでの交流バーション (6,7,8)	ルパン三世・クラスでの交流バーション (5,6,7,10)	ルパン三世・グループでの交流バーション (2,5) グループ創作 (8,10)

このようにして、課題①については、学習者が何を目標としてどのように授業をすすめ、具体的にどんな活動によって目標を達成しようとするのかを確認してから授業に取り組めるような環境を構成した。

### 3. 個人内の成長をふりかえる自己評価項目の提示と評価の実施

課題②「単元全体の達成目標をふまえて自己評価項目をどのように提示したらよいのか」及び課題③「学習者の自己評価をどのような方法によって拾い上げたらよいのか」に対する解決策としては、授業ガイドラインに示した評価活動を実践するための具体策を構想した。個人内の伸びを評価できるようにするため、毎時の取り組みを記録し、自分の成長をふりかえることができるような場を設定した。具体的には、「今日の学習記録」シートを作成し、毎時の活動後に「ふりかえり」の時間を設定した。「今日の学習記録」には、活動内容、自己評価、各達成目標に関してできるようになったことや今後の課題などのコメント、授業や自分自身や仲間についての気づきなどを記録するようにした。図2に授業で使用した「今日の学習記録」を示す。

月 日 【今日の学習記録】

番号

◆今日の活動内容(単元末のふりかえり時に自分が見てわかるように箇条書きで書く)

期	5・6	7・8			
班	1	2	3		
組	A	B	C	D	E

◆自己評価 4.よくできた 3.まあまあできた 2.あまりできなかった 1.できなかった 左記の自己評価が特に該当する活動に○を。複数記入可

評価項目	自己評価	レク	体ほ	ダンス	食育	コメント
1. あなたは仲間と楽しく授業に参加することができましたか。	4 3 2 1					
2. あなたは仲間の体を大切に、丁寧に関わることができましたか。	4 3 2 1					
3. あなたは仲間の意見に耳を傾けたり支持したりできましたか。	4 3 2 1					
4. あなたは課題の達成に向けて仲間と積極的に意見を出し合えましたか。	4 3 2 1					
5. あなたは仲間と声をかけることができましたか。	4 3 2 1					
6. あなたはアイコンタクトを使って仲間と一緒に動きましたか。	4 3 2 1					
7. あなたは表情や動きから相手の気持ちを感じることができましたか。	4 3 2 1					
8. あなたは試行錯誤しながら動きを工夫することができましたか。	4 3 2 1					
9. あなたは仲間を励ましたり支援したりすることができましたか。	4 3 2 1					
10. あなたは仲間と一つになったように感じましたか。	4 3 2 1					

◆今日の授業で、からだや動きについて、どんなことを感じましたか。以下に書きましょう。

図2 今日の学習記録

「今日の学習記録」は毎時1頁ずつ記録するようにした。単元末には、学習者自身が全ての記録を綴じたものを読み返し、自分の記録の変化を分析しながら総括的な自己評価をおこなうという課題を設定した。

#### 4. 学習者の取り組みの姿勢に対する達成目標の提示の影響

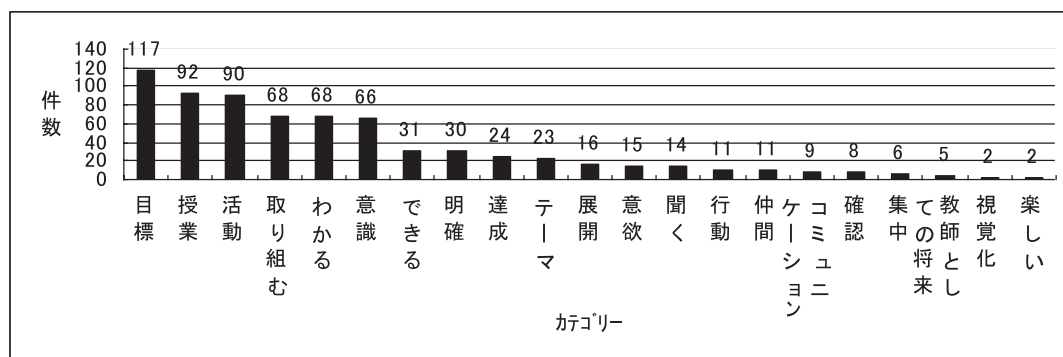
##### (1) テキストデータ分析による学習者の内省文のカテゴリー化

単元末課題の一つに「毎回の授業の冒頭で『今日のテーマ』や活動の目標を聞いたことは取り組みの姿勢に何か影響を与えたか。与えたとすればどんなことだったか。」という設問を設定し、学習者177名全員の回答を得た。そのうち、「影響を与えた」と回答したのは159名であり、全体の89.8%を占めていた。したがって、目標やテーマの提示は殆どの学習者に対して何らかの影響を与えていたといえる。それはどんな影響だったのであろうか。次に、「影響を与えた」と回答した159名の内省文からどんな影響だったかに関する記述を拾い上げ、分析した。

上記159名分の内省文の全文をMicrosoft Excel 2007に入力してテキストデータとし、各学習者が記述した内省文に1つずつ合計159のデータIDを付した。その後、SPSS Text Analysis for Surveys 3.0を用いてそれらのデータからキーワードを抽出し、カテゴリー化した。その結果、グラフ1に示すような21のカテゴリーが抽出された。グラフ中の件数は、各カテゴリーに分類されたデータの件数である。同一のデータであっても、複数のカテゴリーに分類される例もあるため、これらの件数はのべ数となっている。

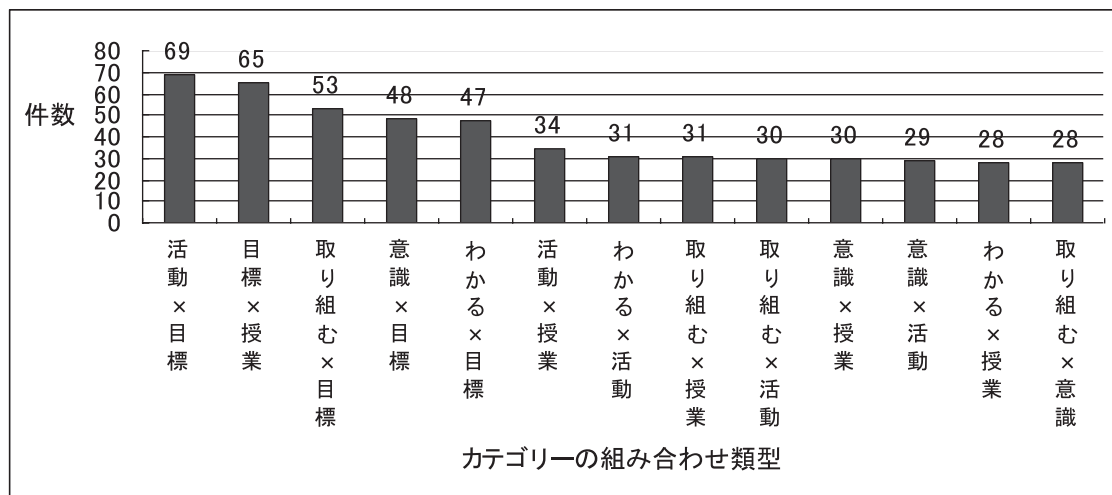
件数の多いカテゴリーを順に拾い上げると、「目標 (117件)」「授業 (92件)」「活動 (90件)」の3つのカテゴリーが最上位に、次いで「取り組む (68件)」「わかる (68件)」「意識 (66件)」の3つのカテゴリーが上位にあげられる。





グラフ1 内省文のカテゴリーと件数

実際には、「目標」「授業」「活動」「取り組む」「わかる」「意識」の6つのカテゴリーは互いに重複して分類されている例が多い。その集計結果をグラフ2に示す。



グラフ2 カテゴリーの組み合わせ類型と件数

このグラフは、同一IDの内省文に、例えば「活動」と「目標」に分類されているキーワードが組み合わせられて記述されている例が69件あった、ということを表している。ここでは、分析ソフトの都合上、2つのカテゴリーの組み合わせ類型しか集計できなかったが、実際の内省文には、「目標」「授業」「活動」「取り組む」「わかる」「意識」といったキーワードが3つ以上組み合わせられて記述されている場合もある。

(2) 内省文の主題の抽出

これらの「目標」「授業」「活動」「取り組む」「わかる」「意識」といったキーワードはどういった文脈で用いられているのだろうか。「前述のキーワードがどのような文章を構成しているのか」「それらの文章はどんな文脈を構成しているのか」といった観点から学習者の内省文を見直し、各々の主題を抽出した。その際、文脈の構成をみるため、学習者一人あたりの内省文をまるごと扱うこととした。その結果、一つの内省文が複数の主題について記述している例もあるが、総体として、学習者の内省文から以下の【 】に示す25の主題を抽出することができた。

【活動の意味を理解】 【めざす方向が明確】 【何に気をつけて活動したらいいかわかる】  
【自分なりに考えて行動できる】 【どうしたら達成できるか考える】 【随時テーマを確認できる】  
【意識して行動できる】 【ふりかえりの観点が明確】 【自信をもってふりかえることができる】  
【到達度の確認ができる】 【達成感・満足感が得られた】 【授業を受けっぱなしにならない】  
【意味のある活動になる】 【何かを学ぶ】 【自分の将来につなぐ】 【活動内容とテーマのつながりに気づく】  
【皆で目標を共有】 【一体感がうまれた】 【授業に取り組みやすい】  
【積極的に取り組む】 【自主的に取り組む】 【スムーズに行動する】 【気持ちの切り替えができる】  
【一つひとつの活動に集中できる】 【活動にメリハリがつく】

以下に、【 】に抽出された主題を、「 」に内省文の典型例を示す。

【活動の意味を理解】

「活動の目標があることで一つ一つの活動をする意味がよく分かり取り組みやすかったです。」

「毎回の授業でテーマや目標を聞くことで、その活動にはどんな意図があり、どのような工夫をしたらその目標を達成できるのかといったようなことを考えて活動することができた。」

【めざす方向が明確】

「目指す方向性が明確になった。また、漠然と活動に取り組むのではないので、反省もしやすかった。」

【何に気をつけて活動したらいいかわかる】

「目標を明確に持つことが出来たので、どんな所に気を付ければ良いのか、周りとの様にコミュニケーションを取れば良いのかなど、活動する上でのヒントになりました。」

【自分なりに考えて行動できる】

「授業の冒頭で今日のテーマや活動の目標を聞いたことでそのことを意識して授業に取り組んだので、ただ単に言われたことをするのではなく、自分なりに考えて行動することができました。」

【どうしたら達成できるか考える】

「授業の冒頭で目標を聞くことで何のためにしているのかが明確になり、自分で目標が達成されているのかを考えたり、どう工夫するとその目標に近づけるのかを思考するようになった。また、目標を聞くことで目指すものができ、一生懸命さが自分の中で増したように感じた。」

【随時テーマを確認できる】

「今日のテーマが授業中ずっとホワイトボードに書いてあったので、随時テーマの確認をすることができました。」

【意識して行動できる】

「授業の内容やねらいがはじめから分かっていることで目標を授業中に意識してその達成に励んだり、前の時間に足りなかったところを考える時間ができ、それを克服することができた。」

【ふりかえりの観点が明確】

「今日のテーマや活動の目標を聞いたことで、今日はこういうことをするんだなという見通しが立つし、そうゆう風に行動できてるかなと確認できた。」

【自信をもってふりかえることができる】

「今日のテーマや活動目標を毎回聞くことでその活動では特にどんなことに重点をおこう、

と前向きな姿勢が出来、また記録にも自信をもって書くことができた。」

#### 【到達度の確認ができる】

「テーマを最初に聞いておくことで、授業内容の意味を理解でき、より積極的に取り組むことができました。自分が目標に到達できたかどうか、どこまで目標に近づくことができたかどうか考える機会ができて良かったです。」

#### 【達成感・満足感が得られた】

「どんなことに気をつけてたら良いかが分かりました。目標を持った取り組みにつながり、こんなことを感じながら授業を進めればというイメージが持てました。そのため取り組みを実行した時自分は目標としていることを感じているという達成感や満足感が得られました。」

#### 【授業を受けっぱなしにならない】

「目標を授業の最初に聞くことで、90分間の授業の中で大切にすること、自分のすべきことが認識できると共に、授業の最後に目標に対して自分を見つめかえすことが出来たので授業を受けっぱなしにすることがなかった。」

#### 【意味のある活動になる】

「授業の初めに目標を決めることにより先生が何を意図してこのような授業をやっているのが明確になり、どのようにしたら上手くいくかも明確となり、より意味のある活動ができた。」

#### 【何かを学ぶ】

「今日のテーマや活動の目標を明らかにすることによって、ただ楽しむだけではなくこの時間も授業であり何かを学ばなければならないということを意識できた。授業の最後に学習記録を書く時になってこの時間の自分は目標を達成できただろうかと振り返ることが多かった。」

#### 【自分の将来につなぐ】

「テーマと目標、そこから達成できる内容を説明され、今日のテーマをクリアしたらこういう目標が達成できるんだなと思いつても熱心に授業を受けることができました。これからの教育実習、基礎体験活動での分野でも役立つと私は考え、毎回のテーマの自己の達成基準などを考え授業の後などで反省するようにしていました。」

「目標が定められていることで、今日の活動がどのようなものなのかどのように取り組めばいいのかということが分かりました。授業の最初に提示されることで意識をもつことができたと思います。私には教員になってからも求められる力だと感じるものが多かったので苦手なものでも将来必要だと思うことによって最後までやりきることができたのだと思います。」

「テーマや活動目標が最初にわかった上で行動することで、自分の中でどのように行動したら良いかという目標ができて何も考えずに動くよりもはるかに活動が充実したものになりました。自分が教師になり体育を教える側に立ったときは、この形式でやってみたいと思います。」

#### 【活動内容とテーマのつながりに気づく】

「毎回授業の終わりに振り返っている時、ああ今日のテーマに基づくとこの内容になるのかと気付かされることがあり次の授業に前回のテーマや目標をふまえて臨むようになりました。」

#### 【皆で目標を共有】

「影響は与えたと思う。目標を明確に定めたことに対してみんなの焦点が定まり、その達成に向けて一丸となる、という雰囲気である。」

**【一体感がうまれた】**

「何を意識して活動に取り組めばよいか分かり、ひとつひとつの活動をしっかり取り組めた。またみんなで共通の意識をすることが出来るため、一体感がうまれたと思う。」

**【授業に取り組みやすい】**

「冒頭で今日のテーマを聞くことによって活動内容の軸がぶれず進んで活動に参加することができた。何のためにこの活動があるかがはっきりしていたため授業に取り組みやすかった。」

**【積極的に取り組む】**

「その日にどんな目標を持って、どのような活動をするのかということが明確に提示されていたので、より積極的に素早く動くことができましたと思います。」

**【自主的に取り組む】**

「今日のテーマや活動の目標を聞くことにより、何とか自分なりに達成したいという心意気のため、進んで自分から仲間へ声をかけたり、自由に動いたり、自主的に取り組むことへの強いやる気が湧いた。」

**【スムーズに行動する】**

「今から何をするのかわかることでスムーズに動くことができました。また、テーマや目標を聞くことで、活動の目的が明確になり、活動を行なうことで、どんなことを学ぶことができるのか分かり、より授業に目標を持って参加することができました。」

**【気持ちの切り替えができる】 【一つひとつの活動に集中できる】**

「事前に説明されることで、次の行動への気持ちの切り替えがしやすかった。また、それによって1つひとつの活動に対して、すごく集中することが出来た。」

**【活動にメリハリがつく】**

「目的が明確になり何に気をつけて活動すればよいか分かり目的意識をもって活動することができた。次やることがわかっているためメリハリをつけて活動することができた。」

**(3) 主題からみる学習者の取り組み**

これらの典型例の文脈に着目すると、抽出された主題がどのような構造を形成しているかを明らかにすることができる。そこで、文脈の展開にそって各主題を並べてみた。学習者の内省文から抽出された主題を授業の展開にそって時系列に並べ、授業の展開にそった学習者の取り組みの可視化を試みた。すると、図3に示すような学習者の取り組み方の構造がみえてきた。

**1) 導入時**

導入時には、まず、単元全体の目標やその日のテーマ、そして個々の活動が体现している目標を知ることで、学習者は活動の意味が理解でき、それによって、授業の中で自分自身がめざす方向が明確になっていた。そして、めざす方向が明確になったことで、学習者は何に気をつけて活動したらいいかがわかったり授業に取り組みやすと感じたりしていた。

**2) 展開時**

展開時には、授業中に何に気をつけて活動したらいいかわかることで、「今日はこれを頑張ろう」という自分なりの目標を設定したり、どうしたら目標が達成できるかを考えることが出来るようになっていた。また、授業中はずっとホワイトボードに単元全体の目標やその日のテーマが提示されていたため、学習者は活動の折々に随時テーマを確認することができた。授業中

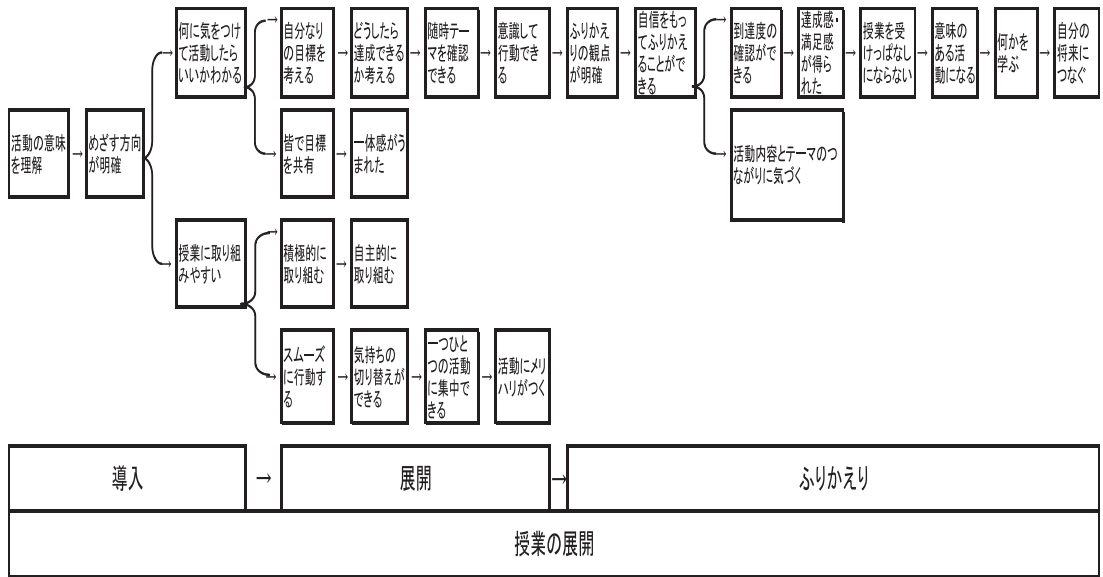


図3 授業の展開と学習者の取り組み方

に目標やテーマを意識して行動できたと学習者が記述している背景には、このような学習環境の構成も有効にはたらいていたのではないだろうか。

また、皆で共通の目標を共有することによって、クラスやグループの中に一体感が生まれたとも複数の学習者が記述している。この授業は1年生の前期に実施されたものであり、入学の時点で主専攻が決まっているⅡ類の学生を除き、多数の学生はまだ主専攻が決まっていない。所属する集団がまだ明確になっていない時期であるだけに、クラスやグループの仲間との一体感を感じられることは、1年生前期の学習者にとって、仲間意識や所属意識の醸成という点でも、重要な意味をもっているのではないかと思われる。

そして、授業に取り組みやすいと感じられることから、学習者の積極的な取り組みや自主的な取り組みも生まれた。それらは、「目標を達成しよう」「自分なりの目標をたてよう」という意欲に支えられていた。学習者は、どうやったら目標を達成できるかを考えながら活動することで、自ら主体的に行動していた。

さらに、その日の授業ですべきことが理解できていることによって、学習者は次の活動へとスムーズに行動することができていた。また、学習者は、一つひとつの活動の目標や意味がわかっているため、活動ごとに気持ちの切り替えができ、個々の活動に集中できたと記述している。このことによって、活動の展開にメリハリがついた、と学習者は指摘している。

### 3) ふりかえり時

目標と評価が一体化しているため、学習者にとってふりかえりの視点が明確であった。そのため、学習者は何についてふりかえればよいのかがわかり、自信をもって自己評価をすることができていた。活動中には目標やテーマを意識していなかった学習者も、ふりかえり時に自己評価をすることで、その日の活動内容とテーマのつながりに気づくことができたことと記述している。その結果、次の授業時に前回のテーマや目標をふまえて臨むようになった学習者もあった。

また、学習者は自己評価をすることによって自らの到達度の確認ができたとも記述している。

自己評価においては取り組みの成果を4段階で評価するように設定されていた。これを手がかりに到達度を確認することによって、授業ガイドラインに示した「自分の成長をふりかえることを通して、一人ひとりの伸びを評価する」という方針が具体化されていたといえよう。

そして、学習者は、自分が何をどのくらいできていたかをふりかえることによって、達成感や満足感を得たり、授業が意味のある活動になったと受け止めたりしていた。学習者は「今日のテーマや活動の目標を明らかにすることによって、ただ楽しむだけではなくこの時間も授業であり何かを学ばなければならないということを意識できた。」と記述している。

それらの学びについて学習者は「これからの教育実習，基礎体験活動での分野でも役立つ」と考えたり「教員になってからも求められる力だ」と感じたりしており，自分の将来につながる学習内容としてとらえていた。また，「自分が教師になり体育を教える側に立ったときは，この形式でやってみたい」との記述もみられ，学習者は自分の将来につながる学びとして授業の成果をふりかえるにあたり，学習内容だけでなく指導方法にも着目していたことがわかった。

#### 4) まとめ

以上のことから，毎回の授業の冒頭で授業の達成目標やその日のテーマを提示したことは，学習者の取り組みの姿勢に肯定的な影響を与えたといえる。その内容を①～⑧にまとめる。

- ① 自分なりの目標や達成基準を設定し，どうしたらそれを達成できるかを考えながら活動に  
取り組む主体性が学習者に生まれた
- ② ふりかえりの観点が明確になることで自分自身の到達度を確かめながら自信をもって成果  
をふりかえることができた
- ③ ふりかえりの結果，学んだ達成感や満足感を得，意味のある活動になったと感じられた
- ④ 授業で学んだことを自分の将来につなごうとする意識をもてた
- ⑤ 皆で目標を共有できたことによりクラスやグループに一体感が生まれた
- ⑥ 積極的または自主的に取り組もうとする姿勢が生まれた
- ⑦ 何をしたらいいのかがわかっているためスムーズに行動でき，次の活動へと気持ちの切り  
替えができた
- ⑧ 一つひとつの活動に集中でき，活動にメリハリがついた

## IV 結論

本研究では，設定した課題解決に向けて授業計画を構想し試行した。また，学習者の内省文の分析から，学習者の取り組み方の構造を明らかにした。以下に，本研究のまとめとして，解決策の試行と学習者の内省文の分析結果とを照合することにより，試行の有効性を検討したい。

課題①「授業が目指す目標をどのように設定し学習者に伝達したらよいのか」に対しては，事前アンケート調査の結果をもとに，授業のすすめ方や評価のしかたのガイドラインを設定し，初回オリエンテーション時に提示した。また，毎回の授業の冒頭に単元全体の目標と個々の授業のテーマを提示した。同時に，個々の活動がどの目標を具体化するために選定されているかについても伝達した。これにより，学習者は活動の意味が理解でき，自分なりの目標や達成基準を設定しいかに達成するかを考えながら活動するなど主体的に取り組むことができていた。

課題②「その目標をふまえて自己評価項目をどのように提示したらよいのか」及び③「学習

者の自己評価をどのような方法によって拾い上げたらよいのか」に対しては、「今日の学習記録」シートを作成し、毎時の活動後にふりかえりの時間を設定して、活動内容、自己評価、各達成目標に関してできるようになったことや今後の課題などを記録するようにした。また、単元末には、学習者自身が全ての記録を綴じたものを読み返し、自分の記録の変化を分析しながら総括的な自己評価をおこなうという課題を設定した。評価項目は達成目標と一体化していたため、学習者は自分自身の到達度を確かめながら自信をもって成果をふりかえることができていた。

以上のことから、本研究における課題解決のための試行は有効であったと結論づけられる。

## V 今後の課題

本研究は、間身体コミュニケーション力の育成をめざす体育授業における評価システムの構築に向けて、学習者の主体的な取り組みを促す自己評価活動の試行と検証をおこなった。その成果を受けて平成23（2011）年度の授業では相互評価活動の充実に取り組んだ。今後はその検証を試みるとともに、教師による評価の視点の設定についても考察し、研究成果を積み上げたい。

## 参考文献

- 1) 橋本公雄 (2009) 「健康・スポーツ科学演習」の授業で人間関係は醸成されるか?. 大学体育学, 第6号: 23-31.
- 2) 廣兼志保・大橋奈希左 (2008) 教員養成課程入門期の学生のための身体教育プログラム開発—協同学習による間身体的コミュニケーション力の育成をめざして—。島根大学教育学部附属教育支援センター紀要, 第7号: 39-52.
- 3) 廣兼志保・大橋奈希左 (2009) 大学体育授業における身体コミュニケーション力育成のための実践研究-学習者の内省文を手がかりとした評価項目の作成-。島根大学教育学部紀要, 第43巻: 31-39.
- 4) 西田順一・橋本公雄・山本勝昭 (2009a) 「大福帳」を用いて対人コミュニケーションスキル支援を意図した大学体育実技が初年次学生の大学適応感に及ぼす影響。大学体育学, 第6号: 43-54.
- 5) 西田順一・橋本公雄 (2009b) 初年次学生の対人コミュニケーションスキル改善を意図した生涯スポーツ教育プログラムの心理社会的有効性。大学体育学, 第6号: 91-99.
- 6) 大橋奈希左・廣兼志保 (2011) 教員養成課程における身体コミュニケーション力育成のための実践的研究—学習者の相互評価を目指して—。舞踊教育学研究第13号: 21-29.
- 7) 杉山佳生 (2008) スポーツ実践授業におけるコミュニケーションスキル向上の可能性。大学体育学, 第5号: 3-11.

この論文は、平成23年度科学研究費補助金（基盤研究C）（一般）（課題番号22500543）「教員養成課程における間身体コミュニケーション力育成のための評価システムの構築」の助成をうけておこなった研究成果の一部である。